
 その他

順天堂大学保健看護学部 順天堂保健看護研究 9
P.66- 71 (2021)

コロナ禍における新入生スタートアップセミナー 2020 「仁（JIN）への道」の取り組み

Report of the Freshman Startup Seminar 2020 “The Way to JIN” in COVID-19 Pandemic.

山本哲子 ¹⁾ YAMAMOTO Tetsuko	辻川比呂斗 ¹⁾ TSUJIKAWA Hiroto	榎本佳子 ¹⁾ ENOMOTO Yoshiko	林亮 ¹⁾ HAYASHI Ryo
影山孝子 ¹⁾ KAGEYAMA Takako	土居雅奈 ¹⁾ DOI Wakana	栗原明美 ¹⁾ KURIHARA Akemi	長沼淳 ¹⁾ NAGANUMA Atsushi
金井健史 ²⁾ KANAI Takefumi	中村剛 ³⁾ NAKAMURA Tsuyoshi	濱田千江子 ¹⁾ HAMADA Chieko	

要旨

入学直後に初年次教育プログラムとして実施しているスタートアップセミナーを本年は COVID-19 の影響のため、Zoom を利用したオンラインと対面のハイブリッド形式で6回に分けて実施した。プログラムは、前期をコロナ禍で過ごした学生の状況を鑑み従来のものを一部変更し、目標を中長期的な視点から「学生生活の中で、自己理解・他者理解を深め、主体的に学習するための心構えを身に付ける」とした。その結果、学生の振り返り発表では協力して物を作り上げることを通しての喜びや大変さ、自身の成長、グループ活動を円滑に進めるために気付いたことなどが述べられ、様々な学びを得られたようであった。

COVID-19 に伴う混乱は続くと考えられ、次年度以降のスタートアップセミナーがより良いプログラムとなるよう今後も検討を重ねていく。

索引用語：オンライン初年次教育、COVID-19、チームビルディング、
コミュニケーションスキル

Key words : Online First-Year Experience, Team Building, Communication Skills

1. はじめに

新入生スタートアップセミナー（以下、SUS とする）はチームビルディング体験を核に据えた本学部独

自のプログラムとして 2017 年度より開始された初年次教育プログラムである。SUS の目的が「新たな大
学生活のスタートとして、自己理解、他者理解を深め、
主体的に学習するための心構えを身に付けること」で
あることから、これまで入学直後の週末を利用し開
催されてきた。しかしながら、COVID-19 の急速な感
染拡大に伴い、従来の時期での開催は見送ることと
なった。不透明な先行きに一時、本年度の中止も検討
されたが、一年生は入学時オリエンテーションに一

1) 順天堂大学保健看護学部

2) アクセプト

3) 武蔵野大学教育学部

1) *Juntendo University Faculty of Health Science and Nursing*

2) *Accept*

3) *Musashino University Faculty of Education*

度来学して以来、本学部に通うことが出来ず、人間関係の希薄さを感じていることや周囲との学びの習得度の違いへの不安、大学生という感覚が無いなどといった声が一年生より聞かれていたため、学生部委員会において幾度も議論を重ね、後期開始直前にオンラインでの開催を決定した。本報告では、従来のプログラムの利点を活かしオンライン版として修正し、実施したSUS2020について述べる。

II. 実施方法

オンラインではWeb会議サービスのZoomを利用し開催した。オンラインでの実施は従来のような短期間でのチームビルディングの形成は難しく、また、長時間連続でオンライン授業を受講する疲労に伴う集中力の欠如も懸念された。そのため、開催回数を増やし、その分1回のセミナー時間を短縮し、後期授業が開始される直前の9月中旬～12月に全6回で実施した。開催単位はアドバイザーグループ（以下、アドグルとする）単位で大きく4クラスに分け、クラス内では他のアドグル学生との交流を鑑みた5～6人からなる6つの小グループの編成を行った。オンラインでのこのプログラムの実施は対面での関わり以上に細やかな配慮を要すると考え、午前・午後各2クラスの実施とし同一内容のプログラムを1日2回実施した。

【第1～4回目】

Zoomを利用し、オンラインにて実施した。クラスごとにセミナーが開催出来るよう、A～DクラスのミーティングIDを設定した。各回はクラスごとに実施したが、開会式は同一日時で開催した。各グループの話し合いはZoomのブレイクアウトルーム機能を使用し、各ルームに講師用iPadを一台ずつ繋ぎ、対面時のように各グループの様子を同時に確認出来るよう配置した（写真1）。一つ一つのルームを移動する方法であると、学生が困っているタイミングでの関わりが難しいが、各ルームの話し合いの様子を随時見るこ

とが出来よう設定を行ったことで、必要なタイミングでの関わりが行えたと考える。

【グループ活動】

第4回目にグループワークの課題が発表された。グループワークでは「グループで目標をつくり、課題解決を目指す」ことを目的とし、約1か月の期間にグループで三島を探訪しながら新聞の題材を見つける活動を行った。昨年は、上級生がファシリテーターとして関わりをもったが、上級生への事前の研修が困難であったため、上級生の参加は行われなかった。

写真1 iPadを用いたブレイクアウトルーム使用中の学生への関わり



【第5回目】

対面での授業が安定的に行われ始めたこともあり、第5回目、第6回目は対面形式とし、2つの講義室を利用して、ユニバーサル・マスク・ポリシーを遵守し実施した。第5回目は課題の成果をわかちあうことをねらいとし、グループの成果物（新聞）の発表会をコンペティション方式で行った。発表前にグループが作成した新聞をそれぞれクラスメンバーに配達を行い、プレゼンテーションを開始した。その後、各グループおよび最も良かったと思うグループへ「良かったところとその理由」「改善のアドバイス」「感想や共感したこと」という観点をもちフィードバックを行っ

た。発表では、独自で学生にアンケート調査を実施した結果を掲載したグループや、一人暮らし学生に向けて防災情報を加えたグループなど、観光情報だけにとどまらない多様な新聞が紹介された。

成果発表会では教職員に周知し対面もしくは Zoom での参加を促し、各クラス 2～3 名ほどの教員の参加がみられた。Zoom 参加者に対する画面共有などの課題が残ったため、それは今後の検討課題としたい。

【第 6 回目】

「これまでの活動をふりかえり今後（実習）へ生かす」をテーマに実施した。グループ活動を「出来事」「グループプロセス」「個々のメンバーのプロセス」といった視点から振り返り、模造紙にまとめ発表を行った。その後グループメンバー内で、フィードバックカードを交換し、他人の目に映る自分を確認し合った。共に活動を行ったメンバーからの真摯な言葉に学生からは「一生の宝物にする」といった言葉が多く聴かれた。

その後、各自「今のわたし」として自身の持ち味や改善したいこと、学んだことを記載し、実習に向けた目標設定シートを作成した。

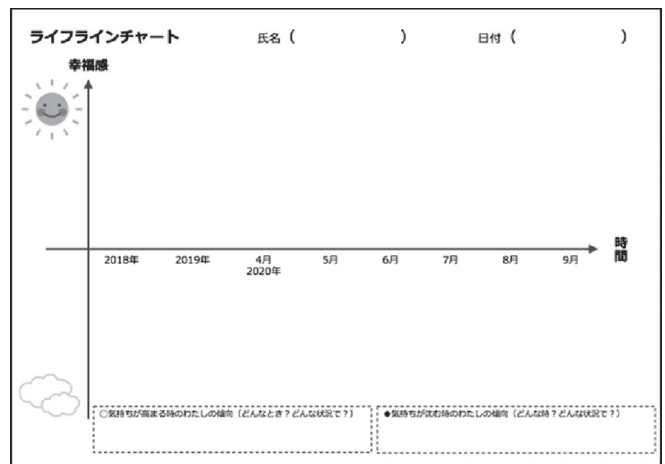
III. 実施内容

実施内容の詳細を表 1 にまとめた。まず、従来の目的が「新たな大学生活のスタートとして」であるため、後期開始前に実施する目的について検討を行った。一年生は 1 月の下旬より高齢者実習 I、基礎看護実習 I が控えていることから、実習に向けた主体的な学びの姿勢を身に付けることも目標に加え、中長期的な視点から「学生生活の中で、自己理解・他者理解を深め、主体的に学習するための心構えを身に付ける」とした。

これまでの実施によって本プログラムは一定の効果が得られることが実証されているが、プログラム内容を本年度の学生の現状や感染対策を鑑みたものに修正する必要があった。一年生より、同学年の他の学生がどのように勉強し生活を送っているのか分からず、自

身がこれで良いのか不安になるとの声が聴かれていた。そのため、第 1 回目のプログラムでは従来の自己紹介に加えて「ライフラインチャート」の作成を行い、グループメンバー内で高校生から現在までの気持ちの浮き沈みを描き、そのとき何があったのか記載し共有してもらうこととした（図 1）。

図 1 ライフラインチャート



第 2 回目、第 3 回目のコンセンサス体験およびペアインタビューは例年通りのプログラムをオンラインでも実施可能と判断しこれまでのプログラムを基に実施した。

第 3 回目までは例年のプログラムを概ね活かすことができたが、例年チームビルディングを目的として 2 日目に行われていたピクチャーラリーの実施は、一学年が同日に全員学外に出てグループ活動を行っていた。そのため、感染拡大状況との兼ね合いからプログラム内容や実施方法の検討が SUS 開始後も続いた。「グループで目標をつくり、課題解決を目指す」という目的は変更せず、本年度は「グループに三島についての新聞作成を依頼された」との課題を設定し、新聞作成期間を約一ヶ月設け、行動時期を各グループに委ねた。加えて、作成依頼内容文に感染対策についても記載し、グループでの作業や学外行動での感染予防への意識付けを行った。第 5 回目、第 6 回目は対面形

式で行えたことから、成果物の発表やグループ活動の振り返り、お互いのフィードバックの実施は例年のプログラムを概ね活かすことができた。加えて今年は、SUSを通して実習に向けた主体的な学びの姿勢を身に付けることも眼目においていることから、第6回目では「実習に向けた目標設定シート」を使用し、学びや気づきを整理し実習に向けた目標を各自設定した。

表1 2019年度と2020年度との実施内容比較一覧

	2019年度	2020年度
開催場所	本学部および三島周辺	オンライン(4回)、本学部(2回)
開催回数	1回(2日間)	6回(6日間)
開催日	4月13日(土)―4月14日(日)	第1回目 9月19日(土) 第2回目 9月20日(日) 第3回目 10月3日(土) 第4回目 10月10日(土) 第5回目 11月14日(土) 第6回目 12月12日(土)
運営者	本学部教員10名・職員2名 外部講師4名 上級生スタッフ27名	本学部教員8名 外部講師2名 (本学部教員は1回につき3～4名)
学生	123名 3クラス編成	124名 A～Dクラス:各31名(124名) 1クラス内6グループ編成 【担当】 外部講師①:A・Cクラス 外部講師②:B・Dクラス
第1日目	開会式 ①オリエンテーション ②わたしのねらい ③コンセンサス体験 ④私たちが成長した未来を描く ⑤私たちのチーム ⑥1日のふりかえり	開催方式:オンライン 開会式 ①全体オリエンテーション テーマ: 自己紹介を通して、自己理解・他者理解を深める。 ①インタビュー式自己紹介 ②わたしのライフラインチャート
第2日目	⑦ピクチャーラリー ⑧エール交換 ⑨アクションプランの作成 ⑩おわりに 閉会式	開催方式:オンライン テーマ: 話し合いを通してよいグループ活動を考える。 ①コンセンサス体験 ②相互理解を深めるコミュニケーション
第3日目		開催方式:オンライン テーマ: 互いの持ち味を活かしたチームをつくる。 ①「順大で学び成長する人」を探求する(ペアインタビュー)。 ②わたしたちのチームをつくる
第4日目		開催方式:オンライン テーマ: グループで目標をつくり、課題解決を目指す。 ①課題発表:三島の魅力を発見する ②目標設定と計画づくり
	―約1ヶ月間―	各グループで取材活動・新聞記事作成
第5日目		開催方式:対面 テーマ: グループ活動の成果を確認し、その体験から学ぶ。 ①プレゼンテーション ②グループ活動の振り返り
第6日目		開催方式:対面 テーマ: これまでの活動を振り返り、今後・実習へ生かす。

IV. 学生の反応

ここでは6回目の振り返りで得られた学生の反応を紹介したい。

【自己の成長の実感】

- ・書籍・SNS・実体験などいろいろな視点から情報を収集する大切さを知った。
- ・実際に行ってみて調べても分からなかったことも知ることができた。
- ・自分のことも、他人のことも理解することができた。
- ・前よりも責任感が強くなった。
- ・みんなで協力して1つのものを作る大変さを知った。
- ・他のグループの発表を聞いて、様々な視点があると思った。
- ・話した事のない友達にしっかりと自分の意見を伝えられた。
- ・自分が感じたことをみんなに伝えるよう文字にすることの難しさを学んだ。
- ・ほぼ初対面だったのに一人一人が真剣に向き合い、じっくりと時間をかけることで打ち解け合うことができた。

【グループ活動に必要なこと】

- ・一つの物を全員で作りに上げることで結束力が上がることを知った。
- ・一人で作るよりも全員で作る方が難しかった。
- ・困った時は相談するのが一番だなと思った。
- ・歩くスピードなど、一人で行動することがないように時々後ろの様子を窺いながら、みんなで目的地に辿り着くことが出来た。そのことから、周りの様子も考えて行動する大切さを学んだ。
- ・一人一人が積極的に意見を出し合うことで、互いの絆が深まり、グループが一体化した。相手の意見を尊重しつつも一人一人が積極的に発言したり、どうしたら相手に理解してもらえるかを考えながら意見を伝えたりコミュニケーション能力が高まりみんなで成長できた。

- ・困っている人を見捨てずフォローすることの大切さを学んだ。
- ・一人で完結させない。みんなで情報共有し全員が納得する形をつくることを学んだ。
- ・話し合いを通して最終的に合意→行動と、皆が納得して活動できた。
- ・困ったらすぐにグループのみんなに助けを求めると、スムーズに解決できることを学んだ。

V. 外部講師からの所感

【オンライン環境での成果と課題】

人間関係づくりがオンライン環境下でも進むのかと開始前は懸念していたが、学生たちの話や様子からそれは払拭された。最終日の学生たちの発表に「お互いに意見を出せるようになった」と多くのグループが発表しており、それはいつからかと訊くと「1, 2回目のセミナーから」とあったためである。また、ある学生はオンラインでのやりとりで「このメンバーに出会えてよかった」と感想をメンバーに伝えていた。これは後述する実施時期によるものが大きかったかもしれない。

また、グループで課題に取り組むことも問題なくできた。約1ヶ月の時間を使った新聞制作は、学生たちの発表によるとみんなで集まって相談、取材、制作するということはあまりできなかったようである。しかし、SNSを使って連絡を取り合い、役割分担しながら活動していた。成果物も各グループでこだわりが見られ、その品質も高いものだった。オンライン環境下でもグループ活動を促すプログラムは実施ができる。

一方で、オンラインでのグループワークは他グループの様子が見えず、学生たちは他グループの様子から刺激を受け、学ぶことが難しかった。目的から外れるグループ活動になった場合は講師が介入するが、今回はそれが多くなった。従来は学生同士で学び合うことを期待し、介入を少なくしたが、オンライン環境下で

はそれができなかつた。活動内容を全体共有する時間を増やすなどを意識してプログラムを設計する必要を感じた。

オンライン環境下では学生の表情しか見えず、それも全員を見ることは難しいため、こちらが伝えている内容がどのように受け止められているかを感じることはできなかつた。プロセスレベルのやりとりを大切にしている本プログラムにおいては工夫が必要だと考える。例えば、チャット機能を用いて自分が思ったことや共感したことなどを随時入力してもらうなどが考えられる。

初回は Zoom に参加ができない、通信環境が悪く途切れ途切れになる、画像・音声機器のトラブルで活動への参加が難しいなどはどうしても発生してしまう。初回実施時前にテストするなどである程度解消できると思うが、完全になくなることは難しい。

【実施時期変更による変化】

第一回、第二回の内容は、学生が置かれている状況に適したものであった。オンライン授業が続き、人間関係や学習に対する不安を抱えている学生たちに、人間関係づくりやその不安の分かち合いは、学生たちが求めているものであったように感じたからだ。学生たちは、活発にコミュニケーションし、人間関係ができたことに互いに喜びを伝えていた。また、第二回が終了した後は対面授業が始まるため、そこへも活かすことができたように感じる。

学生たちの本セミナーへの認識が「友達づくりの機会」から「学びの機会」へ変化しているように感じた。4月に実施していたときは、こちらが「学びの機会」と伝えても「友達づくりの機会」と捉えられることが多かった。しかし、9月から3ヶ月にわたって実施する上に、「実習へつなげる」というメッセージも伝えていたためか、ふりかえりの内容も感想ではなく学びにしていることが多かった。

一方で、本セミナーの位置づけを「実習に向けた

学びの機会」などと明確にし、学生の参加意識の変化をさらに促すことは課題であると感じた。それができると、学生の参加率もより高まるものとする。

VI. まとめ

コロナ禍での本年度の SUS 開催は、中止か開催かと幾度となく学生部で議論を重ね実施にたどり着くことができた。Zoom を用いた形式での6回開催プログラムでは、9月から対面授業が始まり、また年明けに実習が行われることから、それに向けての対人関係を円滑にしつつ、自らが主体的に進めていく事を目標として実施した。実際は第3回目までの内容と大まかな方向性は確定していたものの、COVID-19の感染拡大状況や学生の参加度に合わせて、調整を重ねるなど臨機応変な対応が求められる開催であった。このように例年実施されている新入生スタートアップセミナーとは違う形態でのプログラム実施に、運営者には当初、一抹の不安があったが、回を重ねるごとに学生の表情や言動が変わっていくことを実感することができ安堵した。加えて、例年通りには開催はできなくとも、制限のある中で工夫を重ねてよりよいセミナーを実施するというスタッフ側の向き合い方が今後の組織運営にも活かされていくものと実感した。最後に、開催に際してご協力頂きました皆様に心より御礼申し上げます。

順天堂保健看護研究

Juntendo Journal of Health Science and Nursing

投 稿 規 定

I . 投稿資格

投稿者は、次のいずれかに該当する者とする。

1. 順天堂大学保健看護学部の専任教員および非常勤教員
2. 順天堂大学教職員（非常勤も含む）、同大学院学生、同大学卒業生、同大学研究生、同大学専攻生、同大学協力研究者
3. 編集委員会（当面研究委員会が兼ねる）が認めた者

II . 原稿の種類

原稿の種類は、原著・研究報告・総説・実践報告・その他であり、内容は次の通りである。

1. 原著：論理的かつ明確な構想に基づき得られた研究結果をもとに、新しい知見が論理的に示され、独創性があり、学術的な意義が明らかであるもの。
2. 研究報告：内容的に原著論文には及ばないが、研究結果の意義が大きく、発表する価値が認められるもの。
3. 総説：特定のテーマについて多面的に内外の知見を集め、幅広く概観したもの。
4. 実践報告：教育活動、保健看護実践の報告などで教育・保健看護実践の向上・発展に寄与し、発表の価値が認められるもの。
5. その他：学内活動報告、学会参加報告などの資料で、編集委員会が認めたもの。（査読無し）

III . 倫理的配慮

人および動物が対象である研究は、倫理的に配慮され、その旨が本文中に明記されていること。

IV . 投稿要領（和文）

1. 原稿の書式

原稿のサイズはA4版とし、40字×40行で印字する。原稿提出の際は、オリジナル原稿およびコピー3部（表紙に論文題目のみを記載）を提出する。査読後の最終原稿には原稿を入力した電子媒体を添付する。電子媒体には、論文題目、筆頭者名を記載したラベルを貼付する。

2. 原稿の長さ

投稿原稿の1編は、本文、図・表、文献を含めて下記の字数以内とする。超過した場合は、所要経費を著者の負担とする。

- * 原 著 16,000 字（10 枚）
- * 研究報告 11,200 字（7 枚）
- * 総 説 16,000 字（10 枚）
- * 実践報告 11,200 字（7 枚）
- * そ の 他 11,200 字（7 枚）

3. 原稿の構成

1) 表紙

論文題目、著者名、所属を和文・英文でつけ、希望する論文の種類、連絡先を記入する。

2) 要旨とキーワード

論文には、和文要旨(500字以内)と5個以内のキーワード(和文・英文)をつける。原著の場合は、英文要旨(300語以内)もつける。

3) 本文

(1) 1桁の数字は全角入力、2桁以上の数字は半角

入力、欧文の大文字・小文字は半角入力とする。

(2) 各章の見出し番号は、I、1、1)、(1)、①の順とする。

(3) 単位は、m、cm、mm、g、mg、l、ml等とする。

(4) 略語は慣用のものとする。一般的でない略語を用いる場合は、論文の初出のところで正式用語とともに提示する。

4) 図・表の作成

図・表はそのまま製版するので、ワープロ製図した原図(コピーは不可)とする。写真は鮮明な紙焼き(手札サイズ以上)に限る。裏面に、論文題目と筆頭著者名を明記する。

図・表は本文とは別に1枚ずつ白紙に貼付して添付し、本文中に挿入する位置を指定する。印字例にて各自レイアウトし、原稿制限枚数内に納める。

5) 文献

文献は主要なもののみ限定し、印刷されたものの、入手可能なものが望ましい。引用文献は、原則として、引用順に番号をつけて配列し、引用箇所には肩付き数字1) 2) 3)などを記入する。ただし、論文の種類によっては、MLA(Modern Language Association)に従った引用方式も構わない。

参考文献を入れる場合は、著者名のアルファベット順に末尾にまとめる。著者名は3名まで列挙し、それ以上は「他」で続ける。

欧文雑誌名の省略はIndex Medicusの省略名に準拠し、和文雑誌名は省略しない。

〈引用文献の記載例〉

①雑誌の場合 --- 著者名:論文名,雑誌名,巻(号),頁-頁,西暦年.

例) 江藤千里,萩本理恵子,栗原亜希子,他:先天性横隔膜ヘルニア患児の周術期看護の検討,医

療看護研究,6(1),37-43,2010.

② 単行書の場合 --- 著者名:書籍名 版,発行所,発行地,頁-頁,西暦年.

③ 翻訳書の場合 --- 原著者名:原書名,原書発行年,翻訳者名,翻訳書名 版,頁-頁,翻訳書の発行所,翻訳書,西暦発行年.

④ ウェブページやPDFファイルからの引用の場合

* ウェブページからの引用 --- 著者名(年.月.日):タイトル(URL(Uniform Resource Locator)).

例) 厚生労働省(2010.8.4):中央労働災害防止協会編 製造業における派遣労働者に係わる安全衛生管理マニュアル

<<http://www.mhlw.go.jp/new-info/kobetu/roudou/gyousei/enzen/091130-1.html>>

* PDFファイル等の電子出版物からの引用 --- 基本的に冊子の雑誌の引用スタイルに準じて表記し、URLを明記する。

例) 女性と仕事の未来館(2010.8.4):働く女性の統計派遣労働者数の推移

<http://www.miraikan.go.jp/toukei/002/statistics//data_H21/p089.pdf>

V. 投稿要領 (英文)

1. 英文による投稿は、参考文献、注、図、表も含め、原著8000語、研究報告5600語、総説8000語、実践報告5600語、その他5600語を超えないものとする。

2. 投稿はAPA(American Psychological Association)、AMA(American Medical Association)、MLA(Modern Language Association)のいずれかに従って書かれていることを原則とする。

3. すべての投稿はA4用紙に上下左右に2.5cm以上の余白を取り、半角80字×40行に設定し、フォントは12ポイントのTimes New Romanを使用

する。

4. 表紙をつけ、英語および日本語のキーワード（5つ以内）、タイトル、氏名、所属を記入すること。原著については英文 300 語、日本語 500 字を超えない要約をつける。

1. Original Articles and Review Articles must not be more than 8000 words in length, including references, notes, tables, and figures. Research Reports submissions and Practical Reports submissions should be not more than 5600 words in length. Others should be not more than 5600 words.
2. Papers should be written following the publication manuals of APA(American Psychological Association)、AMA(American Medical Association) or MLA(Modern Language Association).
3. All submissions must be typed on A4 or 8.5”X11”paper. Leave margin of at least 1 inch at the top, bottom, right, and left of every page. Set the lines as 80 strokes X 40 lines. The font should be 12 point-sized Times New Roman.
4. The first page of the file should be a cover sheet that includes 5 or less keywords (English and Japanese), the title, author’s name and identifying references should appear only on the cover sheet. An Original Article should be attached with an abstract (no more than 300 words in English and 500ji in Japanese).

VI. 投稿原稿の誓約書の添付

投稿原稿には、原稿の種類に関わらず、二重投稿および同時投稿でない旨を記載した誓約書(著者全員が

署名・押印した書面)を添付すること。

VII. 原稿無返却

投稿原稿および添付電子媒体は原則として返却しない。

VIII. 論文の採否

投稿原稿は「その他」の原稿以外は査読を行い、編集委員会が原稿の採否、掲載順序を決定する。

IX. 校正

著者校正の際に大幅な加筆修正は認めない。提出期限を遵守することを原則とする。

X. 著者が負担すべき費用

掲載料は無料とする。

別刷りは 30 部まで無料とし、それを超える部数は著者負担とする。その他、印刷上特別な費用(カラー写真など)を必要とした場合は著者負担とする。

XI. 著作権

本誌に掲載された論文の著作権は、順天堂大学保健看護学部に帰属し、同学部が電子化の権利を有する。

XII. 原稿提出先

〒 411-8787 静岡県三島市大宮町 3-7-33

TEL : 055-991-3111 FAX : 055-971-0011

順天堂大学保健看護学部

順天堂保健看護研究 編集委員会

XIII. 附則

この投稿規程は平成 23 年 11 月 1 日より発効する。

この投稿規程は平成 28 年 4 月 1 日より発効する。

この投稿規定は平成 30 年 4 月 1 日より発効する。